東京医科歯科大学　献体の会会報

けんたい　第45号

発行／東京医科歯科大学　献体の会
〒113-8519　東京都文京区湯島1-5-45　03-5803-5147
国立大学法人 東京医科歯科大学医学部解剖学教室内

赤を咲く　　撮影　大木　学

目　次

ご挨拶
東京医科歯科大学医学部長　北川　昌伸　2
東京医科歯科大学歯学部附属病院長　若林　則幸　3
《特別講演》
「健康長寿の秘訣　～高齢期を活き活き健康に～」
桜美林大学　老年学総合研究所所長・大学院教授　鈴木　隆雄　5
《東京医科歯科大学関係行事》
解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式
挨拶　東京医科歯科大学学長　吉澤　靖之　7
挨拶　献体の会会長　佐藤　達夫　8
感謝の言葉　学生代表　高村　彩　10
東京医科歯科大学篤志献体活動の報告会
ならびに第四十四回東京医科歯科大学献体の会総会
令和元年度解剖体追悼式
追悼の辞　東京医科歯科大学学長　吉澤　靖之　12
追悼の辞　東京医科歯科大学医科同窓会理事長　大野喜久郎　13
追悼の言葉　学生代表　山口　博　14
《篤志解剖全国連合会関係行事》
第四十三回篤志解剖全国連合会団体部会・大学部会合同研修会
ならびに第四十九回篤志解剖全国連合会総会　広田　順子　16
《共同通信の取材を受けて》　17
《会員寄稿》
【随筆】
アイちゃんのユニークな献体活動　三浦　教子　20
健体を献体　～「心療内科」って？～　吉本　亮三　21
金峰山登山の思い出　礒　秀夫　22
御遺骨返還式参列と『死』とは何か』を読む　長谷　久枝　24
献体　林　雅実　25
母の献体　衣笠　紀子　27
【詩】　床嶋　まち　28
【短歌】　津田　典男　28
【俳句】　真柄百合子　28
【川柳】　井上　勝弘　29
《東京医科歯科大学献体の会会則》　30
《東京医科歯科大学献体の会役員》　31
《東京医科歯科大学からのお知らせ》　31
《会員のご家族へのお願い》　32
《会報作成にあたって》　33

《ご挨拶》

東京医科歯科大学
医学部長　北川　昌伸

二〇一七年一月より東京医科歯科大学医学部長を拝命しております北川昌伸でございます。

献体の会の会員の皆様には、平素より東京医科歯科大学の教育・研究に対し、深遠なるご理解と多大なるご協力を賜り、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

本学の教育理念は「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」です。これを具現化するため、本学の教育現場では、人類の健康・福祉の増進を通じて平和な社会の実現を志し、人々の幸福に貢献する人材を養成することを目標としております。本学に入学した学生は、一年次に教養部において幅広い教養と豊かな人間性、高い倫理観、自ら考え解決する創造性と開拓力、国際性と指導力を備えた人材となるべく準備を開始いたします。そして入学約一年後に医学・歯学の勉強を始めてすぐに経験するのが人体解剖学実習です。医学教育の内容は年々改革が進められ、国民の皆様により良い医療が提供できる人材育成体制の構築へ向けた努力が続けられています。医学教育の最初の段階で医療人としてのキャリア形成の入口に立つ学生たちに対していかなる教育を提供していくかということは、わが国の将来の医療に大きな影響を及ぼすことになり、非常に重要なものです。多くの学生たちはこの実習に先立ち初めて「献体」について知ることになるわけですが、「自分の死後、遺体を医学・歯学の教育と研究のために役立てたい」というお考えを持った方々がいることを知り、今まで身近に感じたことの少なかった「生と死」について深く考えることになります。「死」というものに直面してそれをどのようにとらえ、考えるのか。このようなことを教育現場で非常に強く語りかけてくれるご遺体を通じた解剖学実習は、献体の会の皆様方のように生あるうちに自らの死を客観的に受け入れて、医学・歯学の教育のために自らの身体を捧げられた尊いお志を受け止める心として間違いなく学生自身の中に一生残っていくものとなることと考えられます。将来、彼らが医療人となり、人々の健康や生命を守り抜くことの困難さに直面した際に、それを乗り越える勇気を与えてくれるのが、解剖実習を通じて献体された方々から授かった心であり、その心を大切にすることで医療人としての道を歩み続けていけるのだと思います。我々が実践すべき教育の現場では、こうした尊いご遺志に対して心より敬意を表しつつ、医学・歯学のさらなる発展のためにこれまでにも増して精進していくことがご献体をいただいた方々とご遺族の皆様のご厚情に報いることに通ずると信じております。

人体解剖学実習では、人体の構造の精緻さ、複雑さ、不思議さを学ぶとともに、お一人お一人の身体の多様性に触れることになります。教科書に書いてある通りのこれまで経験してきた実習と異なり、「自ら解決する」ことでしか理解できない課題に日々出会うことになります。このように、それぞれのご遺体はそれぞれのお立場で医学・歯学の進歩に寄与するだけでなく、人間教育の上でも何ものにも代えがたいご教示をいただき、学生に多くのことを教え導いて下さいます。また、人体解剖学実習では数人の学生がグループとなって学習・実習を進めていきます。個人的に努力をすればよかったこれまでの学習と異なり、一つの目的のために一人一人の個人が責任をもって役割を果たすことが求められます。これは実習を重ねるうちに、チーム医療や社会への対応・貢献といった視野を開いていくことに役立ちます。献体をされた方々のご遺志に導かれて、学生たちは医療人として活躍でき

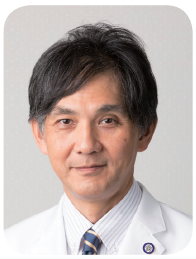
るよう羽ばたき始めるのです。

私は二〇〇五年より医学部包括病理学分野を担当しております。学部での教育・研究に携わるとともに医学部附属病院においては病理部という部門で患者さんの生検・手術材料の診断や病理解剖を行っています。病理学という学問は「病気・病態を理解する」学問であり、病理解剖では、担当の医療チームが現代医学の叡智を集結して手を尽くしたにもかかわらず、功を奏さず、帰らぬ人となったご遺体を解剖させていただき、病巣や臓器の精査を行うとともに治療結果から知りうる新しい知見を解析して、他の患者さんの治療あるいは発症予防に役立てることを目指して勉強させていただいています。

病理解剖にもつながりのある解剖体追悼式やご遺骨返還式には毎年出席させていただいております。その際には献体の会の皆様、献体をされた方々の崇高なるご遺志、そしてご親族の皆様の深いご理解とご厚情に接することができ、学問の発展とそれを支えて下さる方々の心情との結びつきに大いなる感銘を受け、深甚なる感謝の気持ちで満たされております。このような心を持つことは、学問に精進すると同時に、良き医療人を育成することへの社会からの期待と教育の場の責任を改めて強く感じることに通じ、日々の修練にも気概を持って臨ませていただいている次第です。

最後になりましたが、献体の会の会員の皆様方には、東京医科歯科大学の教育・研究に深いご理解とご協力を賜りますとともに、益々ご健康に留意されますようお願い申し上げます。皆様方の末永いご多幸をお祈り申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

《ご挨拶》



東京医科歯科大学
歯学部附属病院長　若林　則幸

歯学部附属病院長を務めております若林と申します。

献体の会の会員の皆様には、国民の健康を支えることを志す若者にとって、なくてはならない貴重な研鑽の機会をお与え下さることに対し、心より御礼申し上げます。

私は歯科の中でも歯を修復するかぶせ物や、失った歯を義歯（ぎし）により補う補綴（ほてつ）を専門として診療に従事し、多くの患者さんと接する機会を賜りました。歯を失って義歯を必要とするようになった患者さんの多くは高齢の患者さんです。しかし、私の患者さんの多くは、たとえ高齢であっても一本でも歯を多く残したい、そうかと言って将来歯が痛くなっては困る、できれば人から義歯を入れていることを気づかれたくない、さらに好きなものは何でも食べたい、という希望を次々とお話しになります。そのような多くの患者さんの願いに対して、ときに現在の歯科医療が無力と感じることもありますが、それでも治療技術は少しずつ進化してきました。振り返ってみますと、八十歳から八十四歳の日本人は、十五年前に自分の歯を平均で九本しか持たなかったのに対し、現在では平均で二十本近くの歯を残せるようになっています。この間の国民の歯の健康に関する著しい向上の理由は、う蝕や歯周病に対する予防手段が広まったことや、健康に関する国民の意識の高まりであると考えられています。しかし、ただ人々が昔よりも上手に歯を磨くようになっただけではこのような結果に至りませ

ん。それは、皆様のご近所にもある身近な歯科医院において、毎日安全な歯科医療が行われ、子供から高齢者までが気軽に安心して通院できる環境があったからこそ実現したものです。そして忘れてならないのは、皆様のご近所にいる歯科医師は、学生時代に体のしくみや治療技術についての教育を膨大な時間を使って享受してきており、そのような医学・歯学教育が、これまで長年にわたって地道に行われてきたことです。

将来は、これまでの進歩に輪をかけて革新的な医療の進化が待っていると思われます。口腔（こうくう）の衛生管理が糖尿病をはじめとした全身の様々な疾患の発症に影響することが明らかになり、従来にはなかった新しい健康増進の方法と指針が示されるようになるでしょう。将来罹患するかも知れない病気が、歯の健診で採取した唾液を使って、ずいぶん前から知ることができるようになるかも知れません。歯の治療に関しては、現在すでに、従来からあった型取りを行わなくても、光学スキャナーと呼ばれる小さな機械で歯の精密な形を記録できるようになっています。歯科の治療は、多くは命にかかわらない病態に対する医療と考えやすい一方で、健康寿命の重要性とともに、生活の質を高く保つことが大切と考えられるようになり、人々の人生を支える重要な医療領域と再認識されています。歯と口腔の疾患を予防して健康を保ち、万一治療が必要になっても、従来より格段に快適に、不安なく治療が受けられるような世の中がもうすぐ実現できるでしょう。そのためには、絶え間ない研究と教育が必要なのです。

さて、このような医学・歯学の研究と教育に、ご献体いただいたご遺体は計り知れない貢献を果たしてきました。医学部、歯学部の学生にとって、解剖実習室に安置されているご遺体と向き合い、教育に自らの身体を捧げようという献体者の方々を目の前にしたときの感激は、一生忘れられないものとなります。私自身も三十数年前に経験した解剖実習のことは、いまでも鮮明に記憶しているところです。そのときは、人体の各部の神経や血管、筋や骨の構造を理解しなければならない一方で、実際には知ることのできないご遺体の生前のお姿やお人柄などを想像し、そのことで頭の中が一杯になってしまったことを思い出します。解剖実習を通して、人体のしくみと働きを学習するだけでなく、人間の尊厳と生命に対する強い畏敬の念を抱くようになり、医療人として備えるべき謙虚さを身に付けることになります。

一方、現代の医学が総力をあげても功を奏さず亡くなられたご遺体は、病理解剖として専門のチームが担当させていただきます。医学の進歩は、以前助からなかった病気の患者さんが助かるようになることで、最も身近に感じられますが、このような学問の進化は、ご遺体の臓器、病巣を研究の対象とさせていただいたことによる、貴重な知見を基に成し得たことです。病気を予防したり、新しい治療法を開発することも、その知見の積み重ねの上にあります。

最後になりましたが、献体の会の会員の皆様方には、本学の教育と研究にこれまでにも増して深いご理解とご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げますとともに、皆様方とご家族の益々の末永いご繁栄とご多幸をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

《特別講演》

「健康長寿の秘訣」―高齢期を活き活き健康に―

桜美林大学
老年学総合研究所所長・大学院教授
鈴木　隆雄

はじめに

これからの日本の超高齢社会の進展のなかで、大きな特徴は七十五歳以上の後期高齢者が著しく増加することです。具体的な数値でみると、現在わが国の六十五歳以上の高齢者人口はおよそ三五〇〇万人（総人口に対する割合は二十八・〇％）ですが、七十五歳以上の後期高齢者は総人口の十四％となっており、前期高齢者と後期高齢者の比はおよそ一対一となっています。しかし、二十年後にはほぼ一対一・五となり、さらに二〇五〇年にはほぼ一対二・〇と前期高齢者数の減少に対し、後期高齢者数は急増します。**表1**は前期高齢者と後期高齢者の大まかな特徴をまとめたものですが、やはり、後期高齢期には加齢に伴う心身の機能の減弱（フレイル、サルコペニア、そして認知症）は避けられない時期と言うことができます。したがって要介護認定者の割合が著しく高いことも特徴的です。

表1　前期高齢者 VS 後期高齢者

前期高齢者（65～74歳）
・健康度が高く活動的
・社会的貢献度（プロダクティブティ）も高い
・就労意欲が高く欧米に比し就労率が高い
後期高齢者（75歳以上）
・心身の機能の減衰が顕在化
・老年症候群、虚弱、認知症が増加
・医療機関受診の割合が高い（85.8％）

高齢期のフレイル

高齢期、特に後期高齢期に出現するフレイルは身体的フレイル、精神・心理学的フレイルそして社会的フレイルを包含する広い概念です（**図1**）。フレイルの定義として、一）体重減少、二）疲労（精神的に前に進めないような状態）、三）身体活動の低下、四）歩行速度の低下、五）握力などの筋力低下の五項目に対して三つ以上の症状を有する場合には、「フレイル」と判定されます。ただ、フレイルの状態は適切な予防対策をすると、元の健康な状態に戻ることが大きな特徴です。わが国の調査から上記の項目の三つ以上に該当するフレイル高齢者は約十一・三％と報告されていますが、加齢に伴ってその有病率は

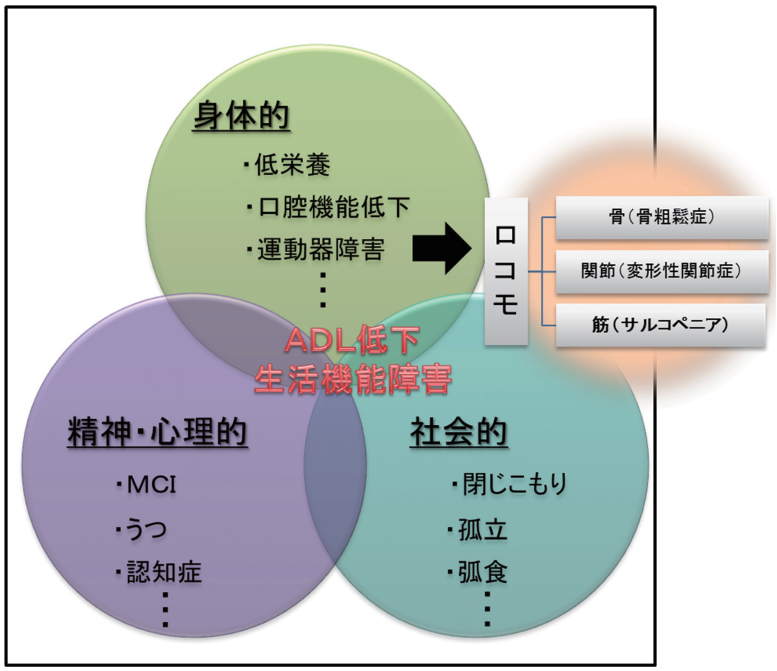


図1　フレイル

上昇し、六十五から六十九歳では五・六％であるのに対し、八十歳以上の高齢者では三十四・九％が該当したと報告されています。

わが国で実施されている「介護予防」というのは、フレイル予防とほぼ同じことです。いずれも毎日の生活を活き活きと、健康長寿を楽しむことができるようにするための取り組みと言うことができます。具体的に対策方法としては、たとえば、高齢期の転倒は、サルコペニアを基盤として発生し（骨粗鬆症と連動し）容易に大腿骨頸部骨折などの骨折をはじめとする外傷とその後のフレイルや要介護状態を引き起こすことから、足腰の筋力を鍛えることやバランス能力を鍛えることが予防のポイントとなります。また、社会的フレイルのひとつである閉じこもりや孤立と密接に関連するのが尿失禁です。尿失禁については軽度のものを含めると、高齢女性の三～四割に出現します。尿失禁によって友人と会うなどの社会活動性の制限がみられ、自信の喪失や外出を控えることにより容易に閉じこもり状態へと移行します。このような尿失禁には骨盤底筋を鍛えることが効果的です（テレビを見ながらボールなどを股にはさんで筋肉をキュッと締めるような簡単な運動です）。また、口腔機能の減弱（オーラル・フレイル）、すなわち咀嚼機能や嚥下機能の低下が低栄養状態をもたらし、食におけるＱＯＬを低下させることはもちろんのこと、高齢期に特徴的な肺炎死亡を増加させるため、口の周りの筋肉や舌の筋肉を鍛えることも予防対策として重視されています。このようにフレイルの初期には、自己の努力でかなりの程度、予防することが可能で、適切な介入により生活機能の維持と要介護状態の予防は十分可能で、実際多くのランダム化研究という科学的根拠に基づく対応策が確立しています。

栄養と運動によるフレイル予防の重要性

フレイルをもたらす要因のひとつとして、低栄養の予防が重要です。高齢期の健康の維持にはあらゆる栄養素（水分、たんぱく質、炭水化物、脂質、ビタミン、ミネラル）が必要ですが、特にフレイルとなりやすい後期高齢者では、たんぱく質とビタミンＤの不足に注意する必要があります。日本の七十歳以上の高齢者におけるたんぱく質摂取推奨量は男女ともおよそ一・〇ｇ／kg体重／日とされ、一般の成人推奨量よりもむしろ多い値が設定されています。後期高齢者にあっても十分なたんぱく質摂取が必要となります。また高齢者においてはビタミンＤの不足状態が深刻であることにほとんど関心が払われていません。最近の研究から、高齢期のビタミンＤの不足は単に骨粗鬆症などの骨の健康だけでなく、高血圧、糖尿病、がん、そして認知症などとも関係があることが明らかとなり、十分気をつけるようにしたいものです。今後の高齢期、特に後期高齢期の低栄養の予防の視点からも、筋骨格系の健康維持にサルコペニアや転倒予防の視点からも、血中ビタミンＤ濃度の適正な維持はきわめて重要と考えられています。

高齢期における認知症の予防については、まだ十分ではありませんが、認知症の予備群として「軽度認知障害」（ＭＣＩ）の段階で運動と同時に脳を働かせる様な取り組み（「コグニサイズ」とも呼ばれます）を実施することによって、認知機能低下を予防し、認知症発症を先送りさせることが可能であると報告されています。多くの科学的根拠に基づくさまざまなフレイル対策が構築されているのが現状です。

《東京医科歯科大学関係行事》

解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式

平成三十一年二月八日（金）午後二時より、東京医科歯科大学M&Dタワー二階の鈴木章夫記念講堂において、大学からは学長、役員、教職員の二十二名、医学部医学科二年生、歯学部歯学科二年生が出席し、会場にはご遺族などを合わせて約四〇〇名が参列して、第三十五回東京医科歯科大学解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式が執り行われました。

開会の辞に続いて、参列者全員により、この一年間に成願された九十八柱の御主に黙祷を捧げました。吉澤靖之学長の挨拶に続き、ご遺骨の返還が行われました。祭壇のご遺骨とお名前の札は、白手袋を着用し二人組となった解剖学教授、教室員、学生にそれぞれ手渡され、お席でお待ちになるご遺族お一人一人のお手元に届けられました。

次いで、学生代表の歯学部歯学科二年生、高村彩から感謝の言葉が述べられました。続いて、佐藤達夫献体の会会長の挨拶がありました。

引き続き、文部科学大臣感謝状贈呈式が行われ、学長による感謝状読み上げの後、四十九柱のご遺族お一人一人に感謝状が手渡されました。

終わりに、解剖学教員を代表して寺田純雄教授からご遺族の方々にお礼の挨拶があり、解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式は滞りなく終了しました。

ご遺骨の返還

ご挨拶

東京医科歯科大学

学長　吉澤　靖之

本日は、本学のより良き医療人、知と癒しの匠育成の為にご献体くださいました方々のご遺骨返還式を執り行うにあたり、大学を代表して御礼を申し上げたいと思います。まずご遺族の皆様には、お忙しい中お越し頂き、心より感謝申し上げます。

さて、今日の医学・歯学の進歩は目覚しく、様々な領域で新しい知見が集積し、その上テクノロジーの進歩と相俟って、新しい医療技術が開発され、人々の健康と社会の福祉に大きく寄与してまいりました。しかし一方では、ヒトの生命そのものに携わる医療人には、今まで以上に社会的責任や医療倫理が問われております。

医学生・歯学生が専門課程に進み、ヒトのからだに直接接する最初の経験が、人体解剖学実習であります。ご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を学びつつ、生命とは何かに思いを馳せ、その神秘性と尊厳に触れることになります。まず学生は戸惑い、畏れを感じることになりますが、やがて奇跡とも思えるその精緻な人体の構造を知るにつれ、これまで経験したこともない生命に畏敬の念を抱くことになります。同時に、死後に自らの御身体を医学・歯学の発展のためにささげるという、献体という行為が如何に崇高なものであるかを感じ理解することとなります。そして、そのことに心から感謝しつつ、医療人としての教養と感性を研ぎ澄ましてまいります。医学の進歩とともに医の倫理・生命倫理が強く叫ばれておりますが、解剖学実習に献じら

れたご遺体は、無言のうちに「医の倫理とは何たるか」を学生に語りかけて下さっているのであります。

人生の最後に当り、本人の献体という崇高なご遺志を尊重し、今日まで、ご遺体を私どもに委ねて下さいました、ご遺族の皆様の寛大さと寛容に、深く感謝の念と敬意を捧げる次第であります。私ども、医学・歯学教育に携わるものならびに学生たちは、皆様のこの尊いお気持ちを本日さらに深く胸に刻み込んでまいります。ここに、医学・歯学の教育・研究・臨床の発展のために、一層の精進を重ねることをお誓いするとともに、ご献体下さいました方々のご冥福をお祈りしつつ深甚なる感謝を込めて、私の挨拶とさせていただきます。

ご遺骨返還式での学長挨拶

ご挨拶

東京医科歯科大学献体の会 会長
佐藤　達夫

ご遺族の皆様、本日はお忙しいところ、また厳しい寒さのなかをご足労いただきましてまことにありがとうございます。長い間お預かりしました、ご献体なされました方々のご遺骨が、教官の先生方と学生諸君から最愛のご遺族の皆様のもとに無事お返ししていただきました。我々もほっとしているところでございます。献体の意義につきましては学長のご挨拶、また長期間ご遺体に寄り添って実習に励んできた学生の御礼の言葉で十分に言い尽くされておりますので、私は少し補足するにとどめたいと存じます。

さて、解剖学実習の前と後では、学生の目つき、顔つきが違うとよく言われるところです。人間を診療する医師・歯科医師になるためには、人体の構造に通じていなければなりませんが、このことを学生諸君ははじめ、すこし簡単に考えがちのように思います。しかし実際に実習に入ってみると、人体構造ははじめ考えていたよりもずっと複雑であり、正直なところ学生は翻弄されがちです。しかし、いままで見たこともない体内の構造ですから、毎回、新発見の連続という充実した日々を送ることになります。その間に学生の観察眼は緻密化を増し、また複雑な人体構造を自分なりに整理して理解する方法を模索して行きます。将来の診療には人体を科学的に観察する能力が絶対に必要ですが、この能力が解剖学実習を通じて育成されていくのです。ですから、実習終了後の学生の顔は引き締まり、眼が鋭くなったように感じ

られるのが普通です。しかし、それは一面的な見方とも言えましょう。熱心に解剖学実習にとりくめば、このような機会を与えてくださったご遺体にしだいに感謝の念がわいてきます。とりわけ生前の遺志に基づく献体であることを知ったとき、学生諸君は大きなインパクトを受けざるを得ません。学生の視線は鋭い。しかしまなざしはむしろ柔かさをたたえているはずです。

献体は、自分に何の見返りも期待しないことが最大の特徴であります。しかし、献体をお受けする側がこれに甘えてはなりません。教官と学生が、このような尊い献体を最大限に生かして学習を進めることによって、はじめて献体が生かされるからです。東京医科歯科大学の教官と学生は献体なされる方々の尊い美しい心を、しっかりと受けとめてくれています。そして、複雑な人体の構造に潜む美しい仕組みを知れば知るほど、学生のなかに、人びとの健康を守り、病める人々を救わなければならないという意識が高まり、医療倫理感も育成されてくるのであります。その意味で、献体なされた方々は知らず知らずの間に医学・歯学の教育に参加して、大きな影響を与えておられたのであります。

なお、この機会に学生の皆さんにもお願いしておきたいと思います。皆さんが実習終了後にお書きになった感想文集「解剖学実習を終えて」はホームページで読むことができます。そして献体に対する感謝の気持ちとよい医師・歯科医師になりたいという決意をひしひしと感じることができます。ところが、時として、われわれが初心を置き去りにすることがあるのも事実です。そこで、「医師・歯科医師になってからも、時々自分の書いた感想文を読み直してほしい」とお願いします。さらに、学生時代にも節目ふしめで読み返してほしいと付け加えたいと思います。もちろん最も重要な節目はほかならぬ解剖学実習でありますが、もう一つの節目は、めでたく全国共通試験をクリアしてスチューデント・ドクターの認定資格を取り、臨床実習に旅立つときだと思います。患者さんに接する前に、医療チームに加わる前に、ぜひ感想文集を読み返して、初心を確認してほしいと念願します。

さて、献体が他のボランティア行為と異なるもう一つの特徴として、ご希望がかなえられるときには、ご本人はすでにこの世におられないということがあげられます。ご本人の究極の目的が達成されるには、ご遺族の方々のご助力が絶対に必要でありました。最愛の肉親が亡くなった悲しみのなかで、ご本人のご希望をかなえてくださいましたご遺族の皆様に感謝と敬意を表する次第でございます。

本日は、ご遺骨返還式にご出席いただきまして、まことに有難うございます。

解剖学教室教員からご遺族へ感謝状贈呈

感謝の言葉

東京医科歯科大学　学生代表
歯学部歯学科　第二学年　高村　彩

はじめに、東京医科歯科大学の学生を代表いたしまして、ご献体くださいました故人の皆様、ならびにご遺族の皆様に感謝申し上げます。

私達学生は、一年間の教養教育を経て、今年度、第二学年のはじめに、基礎医学としての解剖学実習をさせていただきました。学びの密度が高く、振り返ればあっという間だったようにも感じられるこの実習に、私は二つの大きな意義を見出しておりました。

ひとつ目は、医師や歯科医師としての学識を十分に高めるということです。私達は実習に先立ち、教科書によって人体の構造を学びますが、そこにあるのは文章と平面的な図や写真のみです。教科書だけで勉強するにはあまりに複雑で精巧なつくりをしている人体の構造を三次元的に理解するには、ご遺体を解剖させていただくことが大変重要だと感じました。教科書で学び、頭の中に描かれている図を思い出しながら、それを徐々に立体化していく過程は、私達に新鮮な刺激や発見、そして学びを与え続けてくださいました。全ての学生が、緊張感を持って毎回の実習に臨み、少しでも多くのことを学んで自分たちの力にしていこうという強い意志を持ってご献体と向き合うことが出来ました。

ふたつ目は、精神的な成長を得ることです。実習にあたり、私達に多くの学びを与えてくださる故人の皆様に対する感謝の気持ちを忘れたことは、ひと時もありません。ご献体をしてくださったという崇高なご篤志に応えるという自覚は、この実習を通して一層確固たるものとなり、私達が将来よりよい医療人になるための強い覚悟へとつながっていったように感じております。そしてその覚悟は、実習中に限らず、医療人としての私達の人生を貫く強いモチベーションとなるでしょう。

さて、私の祖母は、私が中学二年生の時に亡くなり、そして地元の大学病院に献体いたしました。当時、私は、献体が大変意義のある行為だという理解はあった一方で、すぐに祖母の体が家に帰ることはないということに、大きな違和感を覚えておりました。祖母の死によってもたらされた喪失感が、献体という行為によってさらに広げられたように感じ、同意しかねていたのです。

しかし今、解剖学実習がいかに多くの学びを私達学生にもたらしてくださるのかを身を以て感じられたことで、かねてより持ち続けてきた違和感や喪失感を払拭するだけではなく、祖母の意志を、強く誇りに思うようになりました。そして私は、遺族の一人として、祖母の体を解剖した学生が実習で多くを学び、今どこかで、医学の一端を担っていることを強く期待しております。同様に、私達学生も、故人の皆様やご遺族の皆様がお持ちになっている医学の発展に対するご期待に応える使命があります。実習で学んだことを忘れずに、常に探求心を持ち続けて勉学に励むだけではなく、医師・歯科医師となってからは、ひとりひとりの患者さんと真摯に向き合いつづけることで、皆様の尊いご意思に応えられる立派な医療人となり、社会に貢献することが出来るようになるべく、日々精進して参りますことを、ここにお誓いいたします。

終わりに、ご献体くださいました故人の皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、解剖学実習にご協力くださったその崇高なご篤志と、ご遺族の皆様の深いご理解に、改めて感謝を申し上げ、私の「感謝のことば」とさせていただきます。

東京医科歯科大学篤志献体活動の報告会ならびに第四十四回東京医科歯科大学献体の会総会

令和元年五月十八日（土）午後一時より、東京医科歯科大学M&Dタワー二階の鈴木章夫記念講堂において篤志献体活動の報告会並びに東京医科歯科大学献体の会総会が行われました。

爽やかな晴天に恵まれ、会員一五一名、同伴者三十三名の参加がありました。受付横の会員の作品展示コーナーや本学茶道部によるお茶席も賑わいました。

総会に先立ち、二村准教授の司会で篤志献体活動の報告会があり、全員が黙祷の後、解剖学教室の教員紹介と秋田教授の平成三十年度献体成願者は九十四名で、平成三十一年三月現在の生存会員数は二四九八名であることなどの活動の現況報告がありました。

続いて総会に移り、献体の会の広田順子編集委員の司会のもと、片野尚子献体の会理事の開会の辞につづき、田上順次特命副学長からご挨拶をいただきました。

次いで、佐藤達夫献体の会会長の挨拶があり、日本で初めて人体解剖を行って解剖書を刊行した山脇東洋は、自ら解剖をしたわけではなく、他の者に解剖させていた点はヨーロッパの先例と大きく異なっているが、解剖の後に死者の霊を慰め、鎮めるために祭式を行っていることは、死者を単なる物ではないとする日本の文化ともいえる考え方だと述べられました。

献体の会総会受付

さらに礒秀夫理事より、去る三月二十六日に新潟市の日本歯科大学新潟生命歯学部講堂で開催された篤志解剖全国連合会団体部会・大学部会合同研修会ならびに総会の参加報告がありました。

この後、十分間の休憩のあと、「健康長寿の秘訣～高齢期を活き活き健康に～」と題して桜美林大学老年学総合研究所の鈴木隆雄所長・大学院教授の講演がありました。テレビアニメの『サザエさん』に登場する威厳と貫禄たっぷりのお父さん「磯野波平」さんの年齢が実は「五十四歳」と若かったという話に始まって、いま話題のサルコペニア（筋肉量が減少し、筋力や身体機能が低下している状態）、フレイル（虚弱）、認知症の症状と予防法について、ユーモアを交えて分かりやすく説明していただきました。

講演後の質疑応答でも、会員の質問に鈴木先生が「これはよい質問ですね」と気さくに答えられるなど、終始和やかな雰囲気の中、午後三時に総会は終了しました。

献体活動報告会の様子

令和元年度　東京医科歯科大学解剖体追悼式

令和元年十月二十四日木曜日、十三時より、築地本願寺において、東京医科歯科大学解剖体追悼式が行われました。

今回は二〇一九年二月にご遺骨を返還された方々を対象とした追悼式で、その数二九五柱とのこと（病理解剖・法医解剖含む）。

空には雲が重く垂れこめる中、ご遺族、献体の会会員、大学関係者、学生が参列しました。

式はまず、故人のお名前を読み上げる氏名奉読から始まりました。二九五名分のお名前を読み上げる、十八分間にわたる長い時間、その方々の人生に思いを馳せました。その多くは、宿願成就なさった献体登録の方々ですが、中には小児病棟の病理解剖も含まれていることを思い出させる、最近はやりの名前もありました。

全員で黙祷を捧げた後、学長の吉澤靖之先生、医科同窓会理事長の大野喜久郎先生からの追悼の辞に続いて、歯学部学生代表の山口博さんから、感謝のこもった追悼の辞が述べられました。

「三ヶ月間の実習の間、毎回人体の構造の神秘を感じ、教科書とは違う個人差、個性を知ることになった」という言葉に、参列者は深く頷いていました。

参列者全員が献花を終えた後、医学部長の北川昌伸先生からご挨拶があり、十四時に閉会となりました。

閉会後、本願寺のご厚意による法要が行われました。ご説法では、ご住職の御尊父様も献体なさったと知らされ、親近感を持ちました。

十五時過ぎには法要を全て終え、参列者は少し温かいものを胸に抱きつつ、三々五々帰路に着きました。

追悼の辞

東京医科歯科大学長　吉澤　靖之

本日ここに、国立大学法人東京医科歯科大学解剖体追悼式を挙行するにあたり、解剖学・病理学並びに法医学解剖に、ご遺体を捧げてくださいました二九五名の方々に対し、謹んで哀悼の意を表すると共に深い感謝の念を捧げるものであります。

人体解剖学は、医学・歯学の次世代を担う医療人の育成に当たって誠に重要な意義を持っております。

解剖学実習では、学生はご遺体を通して人体の構造や機能の基礎を習得しつつ、初めて、死という逃れようのない生命の尊厳に直面します。これを機に、学生は「自分自身が快適に生きたい」という受動的・利己的な意識から、「自分以外の人が快適に生きるために」という能動的・献身的な思念に変わり、自分たちは「世のため人の為に医学・歯学の道で研鑽を積むのだ」と、医療人としての決意を新たに、自律していくことになります。

病理解剖では、担当の医療チームが現代医学の叡智を駆使し、全力を挙げて治療に臨んだにもかかわらず、効を奏さず、ご遺族の願いも虚しく、帰らぬ人となったご遺体を解剖させていただきます。ご遺体より提供された病巣や臓器の精査と治療結果から知り得る新しい知見は、同じように悩む他の大勢の患者さんの治療あるいは発症予防に役立てることができる貴重な示唆を与えてくださいます。

また、法医学解剖は、黙して語らぬご遺体の死因を特定し、時には犯罪性の有無を明らかにして、社会の秩序の維持に役立つものであり

ます。

このように、それぞれのご遺体は、それぞれの立場で医学・歯学の進歩に光明を投げかけて下さり、そして人間教育の上で、何ものにも変えがたいご教示をいただき、学生の蒙を啓いてくださいます。

医学・歯学の発展のためとはいえ、自らご遺体を献体される崇高純粋な精神、そしてご遺族の示される深いご理解とその寛容なお心に、私どもは改めて深甚なる感謝と敬意を表し、また、心を新たにし、一意専心医学・歯学の教育・研究に一層の精進を重ねることを、固く誓うものであります。

東京医科歯科大学は、菊薫る本日、ここにご遺族並びにご列席の献体の会会員の方々、そしてご来賓の方々とともに、ご献体を賜りました故人の方々を偲び、ここに謹んで追悼の辞といたします。

令和元年十月二十四日

献花の様子

追悼の辞

東京医科歯科大学医科同窓会理事長　大野　喜久郎

本日は東京医科歯科大学の教育と研究のために献体されました方々およびそのご遺族の皆様、東京医科歯科大学の献体の会会員の皆様に対し、東京医科歯科大学医科同窓会を代表致しまして追悼の言葉を申し上げます。

ご親族を亡くされましたご遺族のお悲しみはいかばかりかと拝察するに余りあります。その深い悲しみの中で、ご遺志を尊重し、医学・歯学の教育および研究のために、献体にご理解をいただきましたご遺族のご厚意に対しまして心より感謝申し上げますと共に私どもに科せられました期待と責任の大きさを改めて自覚する次第でございます。

近年、ＭＲＩなどのきわめて精巧でリアルなコンピューター画像により人体を映し出す技術が発達してきましたが、これらの技術はあくまで影にしかすぎません。実際のご遺体の解剖を通して検索することにより、ただ単に画像情報と重なるものが得られるだけではなく、肉眼観察および顕微鏡等によって組織や細胞の実像に迫ることができます。それだけではありません。学生や私どもにとりましては、ご遺体に接することにより改めて人間の尊厳を考えることになるのです。

自らの死を医学・歯学を学ぶものの魂の中に生かし、未来に蘇らせるという尊いご遺志をもってご遺体を捧げられた方々、また深い悲しみの中で解剖にご理解を下さいましたご遺族の方々に心から御礼申し上げます。人は誰も無病息災、不老不死を願いますが、人みな死から逃れることはできません。不幸にして病におかされ、解剖にご遺体を

捧げて下さった方々の心ざしを生かすべく、未来の医学・歯学の進歩と発展を目指し、さらには人類の幸せのためになおいっそう努力して行く所存でございます。

最後になりますが、本日ご列席のご遺族の皆様、献体の会の皆様、そして来賓の皆様方におかれましては、何よりもお健やかでお過ごし下さいますよう心から念願致しまして、私の追悼の言葉といたします。

令和元年十月二十四日

北川医学部長の挨拶

追悼の言葉

東京医科歯科大学　学生代表
歯学部歯学科　第二学年　山口　博

まず初めに、ご献体をして下さった方々、ならびに、ご遺体を私たちに預けてくださいましたご遺族の皆様方に、東京医科歯科大学の学生を代表しまして心から感謝申し上げ、故人の方々に対し謹んで哀悼の意を表します。

私たちは、約三か月間解剖実習を行ってきましたが、毎回の実習は非常に充実していて貴重な体験になりました。医学・歯学を学ぶ上では、どれだけ真剣に講義を聞いたり、どれだけ図説を見て勉強したりしても、実際にご遺体を解剖し、自分の目で確かめることには及びません。

今思えば、初めて解剖実習に臨む日に感じた不安から始まり、実習が進むにつれて、多くの感情が私の胸中に絶えず生まれてきました。先生方の手厚いご指導の下に進めた実習では、図説を参考にしつつ、また友人と協力しながら集中した時間を過ごし、少しずつ見えてくる人体の神秘に、ただただ感動させられました。そして、本日こうした式典を迎え、故人とご遺族の皆様に感謝の意をお伝えすることができるのを心から有難く思うのと同時に、解剖実習がこれほどまでに多くの人たちによって支えられていることを、身をもって感じています。

今振り返ってみると解剖実習の初日、白衣に着替え、実習室に入るときのことを鮮明に覚えています。私の場合は、「死」というものが、あまり身近ではなかったので、最初は、いざご遺体の上にかけられている緑色のシートを前にして、どのようにご遺体と対面すればよいの

か分からず、恐怖心のようなものを抱いていました。しかし、シートをめくると、そこに現れたのは穏やかで優しさに満ち溢れたお顔でした。その瞬間、医学・歯学の発展のために自らの身体を提供するという大変崇高なご遺志をお持ちだったからこそ、今、目の前にいるのだということを思うと、それまで抱いていた恐怖心よりも、その方たちの思いを受け止めて、一生懸命に勉強しなければいけないという気持ちの方が強くなりました。

解剖実習が進んでいくにつれて、人体の構造の複雑さを知るようになりました。また、それと同時に、人体の構造の素晴らしさにただただ感動させられるばかりでした。実際に解剖してみると、図説に描かれているようには綺麗に見ることができない部分があったり、もちろん、人間は機械とは違うので、一人ひとりその構造が少しずつ異なっているところもあったりしました。将来、多くの患者を診ていく身として、精巧で複雑な人体を相手に仕事をしていくということを自覚し、身が引き締まる思いでした。

また、実習している時に常に考えさせられたことがありました。それは、献体してくださった方々がどのような思いで自分の身体を提供してくださったのかということです。献体するという決断は、とても勇気のいることだと思います。もし、自分の家族が献体を希望したとして、私はそれに素直に賛成することができないかもしれません。そう考えた時に、ご献体してくださった方々や、そのご遺族の皆様の、解剖を行う学生に対する期待や願いを感じました。

今後私たちは、医師・歯科医師となるための道を歩んでいきますが、この解剖実習は、将来振り返ったときに、間違いなくその原点になることと思います。私は、献体をしてくださった方々のご厚意に対して、一生懸命勉強していくことによって恩返しできると思います。そのような思いを胸に秘め、これからも努力を怠ることなく勉学に励むことを、故人の方々とご遺族の皆様にお誓いいたします。

最後になりましたが、ご献体をしてくださった故人の皆様を偲ぶとともに、ご遺族の皆様のご健勝を心から念じ申し上げまして、追悼の言葉といたします。

令和元年十月二十四日

追悼式式場の築地本願寺

《篤志解剖全国連合会関係行事》

篤志解剖全国連合会
第四十三回団体部会・大学部会合同研修会、第四十九回総会

平成三十一年三月二十六日、新潟市の日本歯科大学生命歯学部講堂で、篤志解剖全国連合会第四十三回団体部会・大学部会合同研修会が開催され、全国から七十二大学、四十一団体の二三七人の参加者がありました。

会は天野修 篤志解剖全国連合会副会長、石田肇 同常任理事の司会で始まり、開会に先立ち参加者全員が献体成願された方々に対して黙祷をしました。

次に、講演に先立って献体事業に多大な貢献をされた新潟大学名誉教授の熊木克治先生に佐藤会長から第十一回篤志献体賞が授与されました。

次いで、「人体解剖実習と献体運動の原点に立ち返って」というテーマで二人の講師の講演がありました。

講演の第一は岡山市にある川崎医科大学解剖学教室の樋田一徳先生から「篤志献体と医学教育」と題して、ご自分の大学の献体活動の状況を話されました。

講演の第二は千葉県成田市の国際医療福祉大学解剖学教室の小阪淳先生から「新しい医学の『献体』活動」と題して、ご自身の大学の状況を話されました。

その後、質疑応答の後、会は終了しました。

午後は総会になり、鴨下一郎衆議院議員、三ツ林裕巳衆議院議員などの挨拶の後、①平成三十年度会務報告②平成三十年度収支決算承認などについて報告、協議があり、何れも原案通り承認され会は無事終了しました。

次回は山口大学で開催することとなり、会は無事終了しました。

研修会会場

《共同通信の取材を受けて》

5482　広田順子

ある日突然、本会会長の佐藤達夫先生からお電話を受けました。

「実は、共同通信の記者から、献体登録者を紹介してくれと言われているので、あなたを紹介しても良いですか?」とのこと。

詳細は分かりませんでしたが、佐藤先生から直接お話をいただいたのですから、返事は「はい!私でお役に立てるのでしたら!」に決まっています。

記者のかたには、私の職場である鍼灸院にお越しいただくようにお願いしました。いらしたのは、とても若い男性記者でした。彼いわく「日本の献体制度と海外の制度はずいぶん違うので、そこを書きたい」と…。特に、ご遺体を非常に敬うこと、ご遺骨をご遺族に返還することなどが海外と違うとのことでした。

三時間近く話したでしょうか、ずいぶんじっくり取材されるなぁという印象を受けました。何度も「私の考えが、献体登録をされたかたの平均的な考え方ではないです」と断りを入れて話したのですが、彼としてはいわゆる〝ナマの声〟として、私の死生観を知りたいようでした。

それが「死んだ後の体はセミの抜け殻のようなもので、セミの本体はそこにない」という表現であり「人が本当に死ぬのは、その人を思い出す人がいなくなった時だ」という記事の部分です。

記者のかたに、「では、献体登録をしてから、なるべく良い思い出を覚えてもらいたいというふうに生き方が変わりましたか?」と聞かれ、そう言われてみると、ちっとも変っていない自分の生き方を反省しました。

人生を問い直される、良い経験をくださった佐藤達夫先生と、今回記事を翻訳してくださった片野尚子先生に心から感謝いたします。

ちなみに、写真の背景に置かれている解剖図は、佐藤先生監修のものです。記事の趣旨に合ったせいでしょう、記事の中だけでなく、ジャパンタイムズ一面の右上にもカラー写真が使われたこともご報告しておきます。

---

the japan times

急増する献体　死生観の変化を背景として

~登録希望者の増加は、外科研修での献体使用を可能に~

〈Kyodo New〉共同通信　金子怜斗記者　　翻訳：片野尚子

〈以下　新聞記事の翻訳を転載〉

専門家の話によれば、日本では高齢化社会における死生観の変化を背景として、近年、献体登録の希望者が急増しているといいます。

献体運動を推進する篤志解剖全国連合会によると、一九八五年の設立当時六八、〇〇〇人だった献体の登録者は、昨年二〇一八年三月末の時点で、約四倍の約二九六、〇〇〇人に達しています。一方、希望者の急増で、登録を制限する大学も増えました。

鍼灸師をしている広田順子（ひろた・じゅんこ）さん、五十五歳です。数年前に献体の登録をしました。きっかけは、三十代に鍼灸学科の実習の一部として東京医科歯科大学で人体解剖実習を見学したことでした。解剖実習を通じて、いかに多くのことが学べるかを体験し、どうしたら、自分も「人体という書物」として、後に続く方のお役に立てるのかと考

えるようになったといいます。

「献体登録証を受け取ったときは本当に安心しました。私が死んだら、この身体はいわばセミの抜け殻のようなものです。私の姿は人々の思い出の中に残るだけで十分です。」（広田順子さん）

一人暮らしの広田さんにとって、献体の決断は「終活」の一部だったといいます。出生率の急激な低下と高齢化の進行により、高齢者の一人暮らしが特に郊外では目立ってきたことを背景として、人生の終末に向けた準備を進める「終活」への関心が高まっています。

数十年前、人体解剖実習では主に身寄りのない者か身元不明者の遺体が活用されていたため、遺体収集を担当する大学関係者は老人ホームや介護施設を回っていました。当時、献体を希望する人がほとんどおらず、いても、法律上必要な家族の同意が得られなかったのは、仏教の影響で、遺体を傷つける行為は罪とされる思想が強かったことが主な理由とされています。

しかし、篤志解剖全国連合会会長の松村譲児（まつむら・じょうじ）・杏林大学教授によれば、死生観は変化しており、度重なる大震災―例えば、二〇一一年の東日本大震災で家族や友人を失う経験をして、「自分の最期を自らの意思で決めよう」という人が増えたことも献体希望者の増加の理由と考えられるといいます。

その献体登録というのは比較的簡単な手続きです。大学に登録し、献体登録証を受け取ることで完了します。死亡すると、親族らの連絡を受けた大学側が遺体を引き取ります。次いで、遺体に三週間かけて防腐処置を行った後、資格を持った複数の医師による解剖実習が三～七ヶ月かけて行われます。解剖実習終了後、遺体は火葬されます。大学により差もありますが、ご遺骨が家族の元に返却されるまでに長い場合で三年以上かかることもあります。さらに遺骨の引き取り手がなく、生前本人が希望していた場合には、その遺骨は大学の納骨堂に納められます。

篤志解剖全国連合会常任理事の坂井建雄（さかい・たつお）・順天堂大学教授は献体システムの在り方を説明する上で、人体解剖実習の現場の果たす役割が重要だと強調します。「学生は教科書では学べないことを解剖実習で学びます。また、多くの学生にとって解剖実習を通じて、初めて遺体と対面します。学生は卒業して医師となり患者を診るようになっても、そのときの出会いを忘れることはありません。」

しかし、献体したいと考える人の数が需要を上回るようになりました。前述の篤志解剖全国連合会によれば、北海道大学、熊本大学を含む十五大学の献体団体では献体登録の受入を停止しているといいます。この状態が続けば、多くの大学は受け入れを六十歳以上で近隣在住者のみに限定する可能性があります。

坂井教授によれば、現在、九十八大学で年間四、〇〇〇体が人体解剖に献げられています。厚生労働省では、二〇一八年度予算として大学が医学教育だけでなく、内視鏡のような高度な手術手技向上の目的で使用する事業を盛り込みました。

「遺体を使用した研修の実施が献体の需要増加につながる可能性がある」（坂井教授）

解剖実習以外の研修にも献体の使用を拡大することについてはこれまで医療者も含めて議論されてきましたが、教育機関においては医師・歯科医師のみが解剖を実施できるという現在の法律を変更する必要があります。

もう一人の献体登録者である竹村勝彦（たけむら・かつひこ）さん、七十七歳です。竹村さんは二、三年前に献体登録をしました。六十歳の頃、肺炎で二か月入院した際に、人生の終末について真剣に考え始めたといいます。そのときに思い出したのが、亡くなった親友のことです。

竹村さんが死というものを初めて意識したのはテレビ会社のディレクターやレポーターを務めていた四十代の時でした。あの伝説の冒険家・植村直己さんと出会ったのです。植村直己さんは、一九七〇年にデナリ（マッキンリー）に単独初登頂を成功させた後、一九八四年二月に二回目の登頂にも成功しましたが、アラスカのベースキャンプに戻る途中に行方不明となりました。そのアラスカ登頂の前の南極での冒険に竹村さんも同行しました。長年の夢だった犬ぞりによる南極横断についてのドキュメンタリーを撮るために、一年間一緒に過ごしたのでした。

「植村直己は当時の社会に大きな影響を与えた。しかし、彼は亡くなってしまい、何も残さなかった。それから、私は自分の死後、自分の身体をどのようにしようか考え始めたのです」と、妻から献体の同意を得ている竹村さんはいいます。

もう一人の友人で、直木賞受賞で有名な小説『火垂るの墓』の作者で、二〇一五年になくなった野坂昭如さんも、竹村さんの決意に影響を与えました。

「私は火葬の後、遺骨を見てショックを受けた。あれだけ、おしゃべりだった野坂が骨だけになった。私は死んだ後も誰かの役に立ちたいのです。だから、医学部の学生や外科の先生たちを支えるために献体することを決めました。」（竹村さん）

広田さんが取材を受けた記事が掲載された the japan times（左：the japan times の 1 面、右：広田さんが取材を受けた記事）

《会員寄稿》
【随筆】

アイちゃんのユニークな献体活動

3186　三浦　教子

献体の会、会報（四十一号）にて、お伝えした　亡き父　伊藤次翁献体活動の理事長その妻アイ子（母）です。今回の主人公はアイちゃんです。私が十代の頃、亡父より献体の重要性を学びました。その時は「ピン」とこなく、私が結婚し、子どもにもめぐまれ、成長した今日、身内を亡くし、やっと献体の重要性が理解できるようになり、友人や知人からも現代の葬儀関係をさまざま相談されます。

そんな矢先、神戸の妹が母アイ子にこの世に生存してる間に愛媛に帰省しようと現在九十八才になり、実の弟夫婦と心楽しく人生を生きてます。いつもニコニコと笑顔で接してくれるアイちゃんです。亡父が二十三年前天国へ旅立ちました。その後も忘れず献体活動を引きつぎ、日々努力してます。若い頃のアイちゃんの、とっても笑えるお話があります。

絵：長谷久枝

それは、アイちゃんは、老若男女から愛され仲人も昭和二十六年頃から友人、知人、から大切な御子息やおじょうさま（娘様）を良きご縁が成立するため夫婦で努力し、成立したら、亡父と仲人夫婦として儀式に参列していました。人にお願いされたら「嫌」とはいえないアイちゃんです。現在迄たしか成立は「一〇〇〇組」超えているようです。九十七才まで一人生活で、九十八才から弟夫婦と同居、すごいと思いませんか？

さて笑えるユニークなお話します。

私が若いころ、アイちゃんのお家に友人知人を集め、献体についての心がまえをお話していたら、ある女性「れいこ」さんが質問に入りました。アイちゃん、体を切りきざむということは、いたいよね。血が流れて耐えられないよね。おそろしいと。ところがアイちゃんは笑顔で、れいこさん人間、死亡したら、心臓とまり、血がとまるのよ。死人は痛くも何も、ないがね。そこで周囲の人々は「大爆笑」。あのね人間は息がとまったら、いたくも、つらくもないんよ。なんで、おそろしいんよ。れいこさんそんなことばかり言うと、子どもや孫に笑われるよ。とアイちゃんは教えると、またまた爆笑。はじめて耳にした人は、「献体」という認識がないみたいで、献体の言葉すら知らない人が多いようです。アイちゃんは、亡父より学んだ献体の必要性を語りつづけて、週三回、ディーサービスに楽しくかよっています。その道の医学のプロ達に献体の必要性を語りつづけてるみたいです。専門家の前で堂々と語りつづけるアイちゃんは、大正、昭和、平成、令和を生き抜き人のため世のために自ら努力もおしまない「アイちゃん」です。

私も東京に永住して、四十年余なりますが、たまに友人と会話しても、「献体」の意味すら理解できない人が多く、まちがった事柄を洗脳されてるんでしょうね。私もチャンスを見て、多くの人に語りかけ、相談にのる日々です。そして、献体により日本国内の医療技術も向上することはまちがいありません。

どうか自分の死後、身内の死後はぜひ、「献体」の登録に協力して頂ければ、と願う私です。日本の医療は世界でも優秀とされているように海外からもうれしいお言葉を耳にします。日本国向上のためでもあります。私の真実の願いを耳にして下さり、少しでも理解してくださると、幸福に感じます。

健体を献体
～「心療内科」って?～

3941　吉本　亮三

体調不良、倦怠感でクリニックから戻った妻が「心のクリニックで診てもらったら?」と言われたとのこと。が、近くのクリニック紹介はなかったとのこと。九州大学附属病院に心療内科があったことを話したら「九州まで行けということか」と口を尖らせた。

ストレス社会で心を病んでいる人が多い。人はなぜ心を病むのか。文化なのか社会なのか個人なのか・・・。多様な原因の心の病にどう対応すべきなのか?

九州大学医学部附属病院再開発計画策定時に昭和三十八年わが国で初めて「心療内科」が設置されたことを知った。昨今、現代医学が身体面のみを重視してきたことへの批判として、「全人的医療」の重要性をいち早く認識し、実践してきたのがこの「心療内科」だと位置づけている。

一般的に心の病は精神科との認識である。簡単には、こころが原因でこころの症状が生じている場合は精神科、こころが原因で身体の症状が生じている場合は心療内科になる。でも現代社会において心身の病の一番の原因は「こころ」ない言葉でのパワハラ、セクハラ、マタハラ等でのストレスが原因での症状であろう。

先般厚労省発表の十八年度「過労死等の労災補償状況」で、仕事のストレスでうつ病などの「心の病」になり労災請求した人が一八二〇人で、六年連続で過去最多となった。このうち女性が七八八人とのことである。

それにしても政治家の発言の品のなさ、レベルの低さにはうんざりする。麻生副総理兼財務大臣、桜田元五輪相の度重なる確信犯でしかない蔑視発言。もっとひどいのが丸山穂高衆院議員の発言である。衆院本会議の糾弾決議、議員としてあるまじき数々の発言と指摘。本院の権威と品位を著しく失墜させたと非難し国会議員としての資格はない。議員の「資質」疑われる選良ばかりである。参議院選も近い。最も悪いのはそんな「悪」を選んだ我々国民である。

(閑話)

前号で立教セカンドステージ大学受講
台北へ卒業旅行、出発前配偶者とは?
二階で就寝の妻へ、メールで
前夜、私も出掛ける寝ていたら起こして
何もしなくていい→朝食、駅まで送る
語らず。羽田で朝食

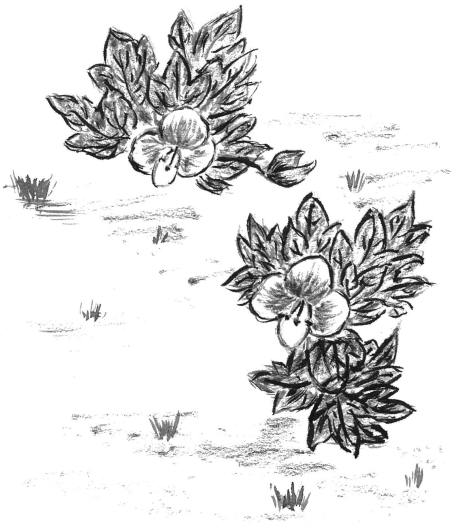
心のクリニックを街の中でも見かける。心療内科を診療科名に掲げる病院も多くなっている。昔は「病は気から」で片づけられていたが、少子超高齢化、核家族化、孤老、多死社会、等々いろいろな心の病要因があり、心療内科のみでなく、埼玉医科大学国際医療センターは「家族外来」で遺族のケアをしている。主にがんで家族を亡くした心身の病患者だ。五十五歳以上の男性の場合伴侶を亡くすと半年で四十%死亡率があがるとのこと。

行政においても介護や病気、引きこもりなど複雑な問題を抱える人や家庭への一体的な対応を目指し厚労省は市町村が一つの窓口で相談を受付ける体制整備を進め「断らない相談窓口」へ転換を図るとしている。

それでお前はどう対応しているか？現役時代は同僚に対して、地域社会の生涯学習の場でも、皮肉や棘のある言葉を発し顰蹙を買っている。家庭において妻だけでなく、とんと会話の消えた息子・娘との、コミュニケーション復活が必須である。

猛省！猛省！　そして重ねて猛省！

「健体を献体」私の使命。こころの健康を再認識。言葉を発する前に一呼吸・・・



絵：長谷久枝

金峰山登山の思い出

4785　礒　秀夫

私は昭和三十五年と平成七年に金峰山に登っています。金峰山は深田久弥の日本百名山の一つで長野、山梨の県境に聳える標高二五九五メートルの山で、きんぷせん、きんぽうざんとも言われているという。昭和三十五年は東京・品川の勤務先の二十代の男性三人、女性一人でこの女性が山女でリーダーだった。なぜこの四人が？　となると全くの偶然で、昼休みに若い者が山にでも行ってみるか、と言ったので十人位が集まる。日にち、場所が決まると四人になった、というだけです。

この時は、品川―甲斐大泉駅―大泉村(泊)―韮崎駅―(バス)―増富ラジウム温泉―金山平―里宮平―富士見平―大日小屋(テント)(泊)―大日岩―森林限界―金峰山・五丈岩―朝日岳―朝日峠―国師岳―北奥千丈岳―シャクナゲ新道―トサカー徳和村―(バス)―塩山―新宿―品川というコースでした。女性はヤッケに登山靴を履いているが男性は地下足袋を履いているが登山としては軽装だった。

八月一日、宿の大泉村を出発、八ヶ岳を背に長坂駅までの下り道を歩く。韮崎駅からバスで一時間半位で終点のラジウム温泉郷に着く。ここから歩くしかない。車道から別れ、山道を一時間半ほど歩くと目指す金峰山と奇岩の風貌の瑞牆山が望める金山平に着く。

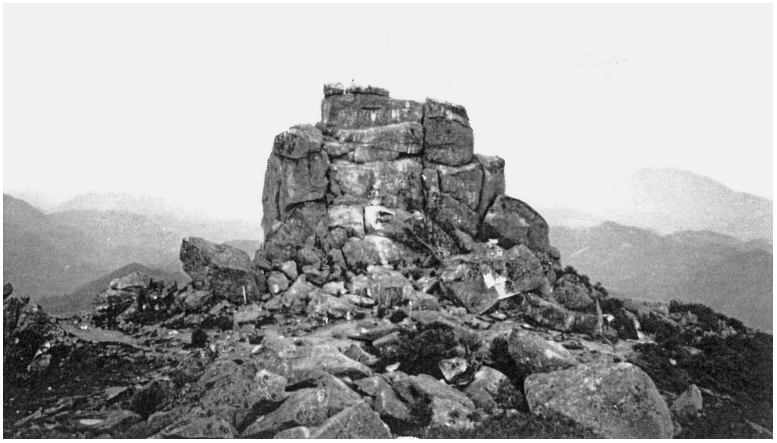
さらに、途中休み、休みではあるが大日小屋に着く。村営の山小屋だがテント張、十数人が夕食を済ませるとゴザに雑魚寝する。頭を並べると場所をとるので頭と足を交互に寝る。男、女の区別はない。

頂上でご来光を仰ぐために、私たち四人は夜中の二時ごろこっそりとテントを抜け出し一本の懐中電灯と月の明かりを頼りに頂上を目指して歩く。彼女もこのコースは初めてだという、幸い星が瞬いている。

しかし時々道を間違えそうになる。二手に分かれて道の柔らかさを踏む。堅い方が登山道に違いない。同行者はいない。森林地帯を過ぎると石ばかりとなる、上に昇れば山頂になる、と思って黙々と昇る。四時頃になると回りが次第に明るくなる、遥かに富士山も眺められる。

山の頂で朝食の飯盒を炊く。即席のカレーライスだ。食後、シンボルの五丈岩に別れを告げ朝日岳、国師岳、北奥千丈岳と縦走して夕刻、徳和村から塩山行きのバスに乗る。

その後、東京から大宮に転居したこともあり仕事の合間をみては近くの上越の谷川岳や那須岳に登っていたが、三十五年ほど前の郷愁の念にかられて金峰山登山を思いついた。当時の仲間にはご無沙汰つづきなので妻と二人で行くことにした。コースは健脚とは言えない妻の足を考え金峰山の登山口に二泊する。



頂上の五丈岩

コースは大宮―新宿―韮崎駅―(バス)―増富ラジウム温泉―金山平―里宮平・瑞懐山荘(泊)―富士見平―大日小屋―大日岩―金峰山頂―大日小屋―富士見平―瑞懐山荘(泊)―金山平―増富ラジウム温泉―(バス)―韮崎駅―新宿―大宮の予定です。

七月二十八日、瑞懐山荘を出発する。以前はテントだった大日小屋は木造で素泊まりの小屋になっていた。この辺りはシャクナゲが咲いている。六畳位のすべすべした大日岩は、以前に来た時は真っ暗で気がつかなかった、上る時はいいが下る時は注意が必要だった。やがて尾根に出る。昼近くになると山頂が近くになったが、下の方から雲が湧いてきた。あと十数分位で頂上かとも思われたが、引き返すことにした。途端に暗雲が近づき雷が鳴りだした。その変化の早いこと、稲妻が尾根を横切って行く、一筋、また一筋。兎に角、尾根を渡り森林地帯にと思ったが、その時間はなかった。頂上付近に十数人はいたはずだが大きな石の陰に隠れているのか、近くの金峰山小屋に避難したのか誰一人見当たらない。雷の収まるのを待てばいいが、麓の小屋に戻る時間を考えると何時までも待てない、稲妻の様子を見ながら七八十メートル位の尾根を妻と一気に駆け降り森林に逃げ込んだ。何処にいたのか、びしょ濡れの夫婦がいた。大きな木陰で傘をさしながら昼のお握りを急いで頬張り、雨の中を麓の宿をめざしてひたすら山道を下った。夕刻を過ぎた六時前だったが、辺りが真っ暗の中を宿に辿り着いた。

帰りが遅いので心配していた宿の主人は私たちが無事戻ったので安心した様子だった。泊り客七人の中、私たちのように頂上近くまで行って、やはり途中から引き返した人も居た様だった。部屋は昨日と同じ部屋、私と妻は冷えた体を風呂で暖め、夕食にしてもらった。

翌日、朝食を済ますと昨日の雷雨が嘘のような青空の下をラジウム温泉のバス停までを歩いた。

それからは年齢を取ったせいもあるが妻も、あの金峰山の雷だけはもうご免、というので、以来、山登りはしていない。

御遺骨返還式参列と『「死」とは何か』を読む

５１８４　長谷　久枝

平成三十一年度、御遺骨返還式に、献体の会編集委員として、初めて参列いたしました。

御遺骨が整然と設えられた祭壇は、厳粛で静謐な雰囲気を湛え、身の引き締まる思いで席に着きました。

式典の詳細は、前述の《東京医科歯科大学関係行事》「解剖体御遺骨返還式及び感謝状贈呈式」に、写真と共に掲載されておりますので、御一読下さることで式典の仔細を想像していただけると思います。また、写真によって式典の粛然とした情景も感じ取っていただけるのではないでしょうか。

ここでは、前述の記載にはなかった会場の様子を、二・三御紹介いたします。

私の前列に座っていらした高齢の御兄妹が、御遺骨を受け取られる際、御遺骨に「おかえりなさい」と声をかけられているのが耳に入りました。とても優しい声音で、心からお還りになる日を待ち望んでいらした様子が窺え、思わず目頭が熱くなり、胸がいっぱいになりました。

他の御遺族の皆様も、二・三人の御家族で御遺骨をお迎えにいらしていましたが、中に八人でのお迎えという御遺族がありました。

亡くなられた方が生前、御家族、御兄弟と仲良く過ごされていたのであろう様子が、偲ばれて、心温まる思いでした。

御遺骨が御遺族に迎えられるたびに、御遺骨のお一人、お一人に、生きて過ごされた忘れられない歳月があり、お迎えに来られた御遺族の皆様に、たくさんの思い出を残されたのだろうと思い、御遺骨を受けとられる御遺族の胸には、どんなにか多くの思いが籠められているのではないかしらと、思わずにいられませんでした。

翌日は東京も雪となった寒い日で、式が終わり、帰り道を辿る頃には今にも雪が降るのではないかしらと思わされる程の厚い雲が空を覆っていましたが、厳かな式典に参列できた感動で、寒さも感じないくらいでした。

そして、近い将来、私にも確実に訪れる情景を目にし、耳にしたことで、気持ちの中に安堵感も生まれ、これからの日々を生きる力とも余裕ともなったように思われました。

さて、近い将来私にも確実に訪れるであろう「死」を、どのように受け入れるべきかを考える年齢となりました。

私は「死」を恐ろしいものとは考えておりません。死は生と繋がったものであり、何らかの理由で、生に終止符が打たれるだけのものが「死」と考えるからです。それは一連の生命の辿る道筋であって避けることができない以上は、静かに受け入れるしかないと思っています。

しかし、愛しい家族を残してゆくことは、自分自身が経験した、祖父母や両親を亡くした時に感じた喪失感、哀しみなどを、残った家族が味わうことでもあります。それを思うととても切なく辛く感じます。

死と向きあうというのは、本当にさまざまな思いを、自らの気持の中で整理してゆかなければならないことです。どのように取り組めばよいのかを考えなくてはなりません。

そのようなときに『ＤＥＡＴＨ「死」とは何か』シェリー・ケーガン著に出会いました。イェール大学で二十数年開講されている講義をまとめたもので、イェール大学出版局が、同大学のさまざまな分野の教員による卓越した講義を紹介するために刊行しているシリーズの一冊ということです。

大学の講義ですから、若い方向きの内容になってはいますが、「死」を考えるうえで年齢は関係ないと考え、読みはじめました。

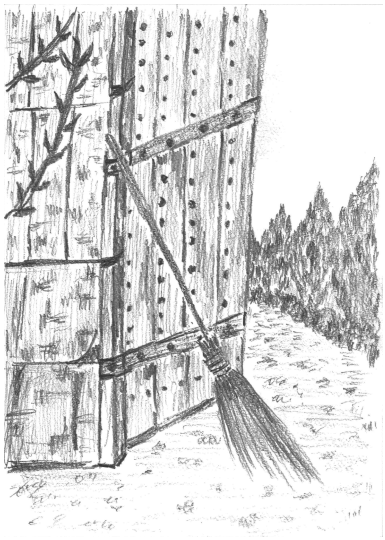
人間にとって死は一〇〇％確実に訪れるものであり、しかも死の訪れは突然で、年齢は全く考慮されるものではありません。

これまで、死を迎える心づもりは少しずつ考えてきたつもりではいましたが、本書を読んで、改めて死と真剣に向き合う気構えができたように思います。

死が突然訪れるものであっても、それまでにしておくべきこと、しておきたいことを、ひとつずつ終わらせてゆくことで、これまで考えていた以上に、死を静かに迎え入れる覚悟もできてゆくと思います。

また、死を常に意識することで、日々を生きていることが、どれ程すばらしいことであるか、家族や友人、知人に恵まれていることの何と有り難いことかと、日常生活のそこここに感じ、その全てに感謝の思いを抱けるようになりました。

『「死」とは何か?』との巡りあいは、私の人生に大きな実りを齎らしてくれました。ありふれた日々を丁寧に生き、日常生活の中にあるささやかな幸福を大切にしたいと思います。



絵：長谷久枝

献体

5219　林　雅実

わたしは献体することにしました。

友人から「平均寿命までまだ何十年もあるのに、どうして献体するの?」と言われました。

ほかの友人も「経済的にそんなに困っているの? どうして献体するの?」と言いました。

生活が苦しくて、お葬式のお金がないから献体することにしたのではありません。

忘れられない看護学校での解剖授業の日のことです。

初めて遺体の前に座りました。こんなに近くで、茶色っぽい男性の遺体に対面しました。

ホルマリンの刺激で、涙がとまらず、鼻水も出てきて、四十五分間の授業は長かったと感じられました。先生が何について講義したのかまったく覚えがなく、ただ「本年度に男女各一体ずつを使って、解剖学を勉強していこう」という言葉だけが耳に入りました。

「あの遺体は何処から来たの? ホームレス?」

「ご家族はどういう思いで肉親をここに入れたの? 棺を買うお金がないの?」

「生前にどんな悪いことをして、死後もこんなばらばらにされないといけないの?」

学生寮にもどって議論を始めました。

メスを入れても、血が出ない。

痛い痛いと叫ばない。

死んでも安らげず、学生たちに少しずつ削られていく日々。ああ、こんな人生は絶対嫌だ! 解剖台に置かれないよう頑張るぞとみんな

口を揃えました。

当時は、土葬の時代でしたので、棺代は大きな出費でした。就職後、わたしは手元に絶対に使わないまとまったお金（棺代）を置いておきました。

その後、仕事を続けるうちに、少しずつ解剖学授業で対面したあの遺体の体表標識を思い出して、注射、治療等行ってきました。特にショック状態で急を要する患者さんの処置では血管がはっきり見えなくても、あの遺体のあの場所のあの血管を思い出し、命繋ぎのルートを確保できました。

日常的な仕事の中、あの遺体に対する感謝の気持ちが少しずつわき上がってきました。

人を助ける日々はあたりまえの私、忙しい、病気にかかる暇がないと口にしていた私、ついに救急搬送されました。

自分の死はどういうこと、自分はどんな形でこの世を去っていくか、そして、死後の私は何処へ行くか等を真剣に考え始めました。

しかし、現実には自分の死に方は予測できなく、私の体を使ってもらえるかどうか分かりません。

もしかして、突如の大地震で津波に呑み込まれて、太平洋のどこかに沈んでしまうかもしれません。

もしかして、急性伝染病で死んだ場合は、蔓延を防ぐために、早速火葬しないといけません。

もしかして、癌の転移で次から次へ、体の臓器も少しずつ切られて、最後の残りは解剖台にのせる意味がなくなってしまうかもしれません。

もしかして、孤独死となり、誰も気付かずに腐敗し、どろどろになった私は部屋から搬出することさえ一苦労かもしれません。

もしかして、認知症になり、献体の手続きをしたこと自体を忘れて、絶叫しながら、完全否定してしまうかもしれません。

間違いなく、私はただ献体の手続きをしただけです。

家族に囲まれて、みんなの見守りの中、人生の幕をとじて、解剖台に載せられ、医者の卵たちに役立つことが私の一番の望みです。

そして、数十年前に自分が解剖学で解剖した遺体のように、未来の白衣天使に我が人生の最善を尽くして、最後に分子の形で花びらと一緒に広い、深い海に入りたいです。

絵：長谷久枝

母の献体

５３８４　衣笠　紀子

一昨年九十一才で亡くなった母は、今年遺骨になって帰ってきました。ご丁寧な返還式もやっていただき、ありがたいことだと思っています。

生前、「何も人様のお役にたつことが出来なかった」とよく言っておりました。せめてもの事に献体することで医学生の方々のお役に立てればと言う母の気持ちを思って賛成いたしました。

最後は認知症になり、まったく会話にならなかったわけではありませんでしたが、施設の方々にも最後の病院になった所の看護師さんの方々にも『こちらの方が癒されました』と言って頂けて、子供として大変嬉しく思いました。

戦争中に、専門学校の時を過ごした母は、勤労奉仕と称して大谷石の切り出し所や風船爆弾の糊付けなど、勉強そっちのけの時代だったそうです。それでも、登山や乗馬を楽しむこともあったようです。

戦後は、宮仕えをしていた大好きな祖父の言いつけで、気に染まぬ父と結婚し、私と弟が生まれました。父は私が十九才の時五十二才で亡くなりましたが、その後母は再婚し、私には辛くもある生活でしたが、母は二人の夫に良く尽くしていたのだと、この頃思うようになりました。

施設生活になり、日常の会話も思うようにならなくなってから、私の父の写真を見せ『この人知ってる?』と聞くと［シーらない］と言う返事でした。『私の父親であなたの夫だった人』と言うと『私こんなのタイプじゃないわ』との答えでした。その言葉で随分父との生活の中で、我慢していたのだと、やっと気が付きました。

それでも父の五十回忌が近いと言うとしてあげたいと申しました。二年ほど早かったのですが、そして会食会には出られないという母の為にお寺に手紙を書いて塔婆を立てて貰うだけの法要にいたしました。

母が亡くなるときには病院の先生のお計らいで私と弟とで手をさすりながら最後まで話かけることが出来ました。親子共に本望な看取り方をさせて頂き、私としては、思い残すことはありません。

一人で生きてきたつもりでも、皆様のお世話になりながらの人生と言うことに改めて、思い至りました。私も献体で少しでも、ご恩に報いたいと思っています。

絵：長谷久枝

【詩】

昨日まで出来たことが

6085　床嶋　まち

昨日まで普通に出来ていたことが
朝目覚めるや一変していることってあるんだ
十八年八月の朝　起き上がろうとしたら
布団から立ち上がれないではないか
左足の付け根から踵まで激痛が走って

やっと起き上がれたが
左足は筋肉が縮んでしまったようだ
その上足の裏まで痺れている
二〜三メートル走ることさえ激痛が走って出来ない

体力に限界があることを思い知る
きっと知力にも限りがあるはず
そうならば、思ったことや考えたことも
文字にしておかなければ消えてしまう

活字にしておけば読み返すことが出来る
自分がこの世から旅立っても
目をとめてくれる人がいるかもしれない

【短歌】

4963　津田　典男

峨の田に稲穂おもたくたれさがりみのり祝ぐかにあきつむれとぶ

北海道地震は大きく地割れして九月半ばに大霜降りぬ

三日三夜風吹きあれてすみわたる円き夜空に銀河きらめく

南禅寺疎水の流れかわらねど兄としたいし人逝きて久し

蓬莱の旅いま終えて日の本に高度七千宇宙の中を

【俳句】

988　真柄　百合子

雪柳薩摩切子のグラス越し

梅雨晴や律義に描き絵を貰ふ

青葉木菟暗がり坂を登るとき

膝折るは祈りの形蟻地獄

旅籠屋の夜空を染めし遠花火

【川柳】

気のおけぬ仲間同志で旨い酒

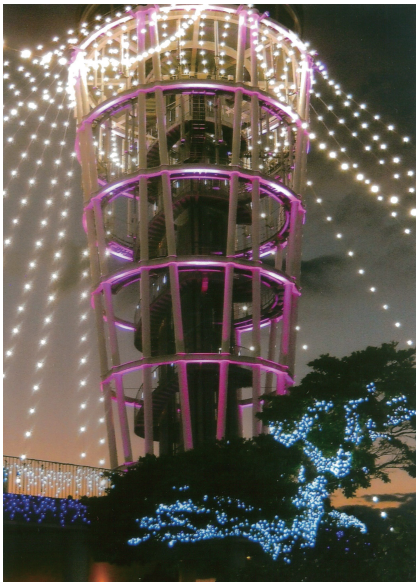
過疎の里晴耕雨読かぎかけず

追い越してのぞく傘のうち

カルピスにストロー二本顔を寄せ

くじ当たる屋敷買ってもまだ余り

3610　井上　勝弘



（撮影：林一彦）

《東京医科歯科大学献体の会会則》

（名称・事務所）

第一条　この会は、東京医科歯科大学献体の会（以下「本会」という。）と称する。

第二条　本会の事務所は、東京医科歯科大学医学部に置く。

（目的・事業）

第三条　本会は、会員相互の親睦を図るとともに、医学及び歯学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を無条件、無報酬で東京医科歯科大学に寄贈することを目的とする。

第四条　本会は前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。

(1) 篤志献体に関する広報活動
(2) 親睦会の開催
(3) 講演会及び集会の開催
(4) 会報の発行
(5) 献体者の慰霊
(6) その他本会の目的達成のため役員会において適当と認めた事項

（会員）

第五条　本会の会員は、第三条の目的に賛同し献体登録した者とする。ただし、この趣旨に反すること、又は本会の品位を著しく傷つける行為のあるときは、役員会において役員の三分の二以上の議決により、会員の登録を取り消すこともある。

第六条　本会に次の役員を置く。

(1) 会長　一名
(2) 副会長　二名
(3) 理事　若干名
(4) 監事　二名

2. 理事となる者は、役員会で選考し、総会の承認を得る。
3. 理事の任期は、二年とする。ただし、再任を妨げない。
4. 会長及び副会長は、理事の互選とする。
5. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
6. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故のあるときは、その職務を代行する。
7. 理事は、役員会を構成し、会務を遂行する。
8. 監事は会計を監査するほか、役員会に出席して意見を述べることができる。

（会議）

第七条　本会の会議は、総会及び役員会とする。

2. 総会は年一回開会し、会長がこれを招集し、その議長となる。
3. 総会においては、次の事項を審議する。

(1) 会の運営及び事業に関する事項
(2) 理事の承認
(3) その他の事項

第八条　役員会は、会長が必要と認めたとき随時開催し、次の事項について審議する。

(1) 会の運営及び事業計画
(2) 収支予算に関する事項
(3) 会の決算及び事業報告
(4) その他会長が必要と認めた事項

2. 役員会の議事は、出席者の過半数をもって議決する。

（顧問及び相談役）

第九条　本会に、顧問及び相談役を若干名置くことができる。

2. 顧問及び相談役は、学識経験者、理事退任者の中から理事会に諮り会長が委嘱し、必要に応じ理事会に出席し意見を述べる。

（会計）
第十条　本会の経費は、補助金、寄付金等をもってこれに当てる。
2．会の会計年度は、四月一日から翌年の三月三十一日までとする。
（その他）
第十一条　本会則の改正は、総会の議を経て定める。
附　則
この会則は昭和五十九年四月二十一日から施行実施する。
この会則は昭和六十二年四月十八日一部改正実施する。
この会則は平成十四年四月一日より改正実施する。

《東京医科歯科大学献体の会役員》

会長	八一〇	佐藤達夫
副会長	二八四四	兵頭作一
副会長	二二七二	星野君枝
理事	九二二	宮内美栄子
理事	二七四二	片野尚子
理事	四五四六	橋本保子
理事	四五六二	飯田静夫
理事	四七八五	礒　秀夫

《東京医科歯科大学からのお知らせ》

◎住所変更等の連絡のお願い

住所、氏名、電話番号、ご家族の連絡先等が変更になった方はできるだけ早く献体事務室まで、お電話または文書等によりご連絡お願いいたします。

会員ご本人が遠方へ住所を移される場合には、献体登録を住所地の近くの大学にご紹介する場合がございます。大学からの距離が非常に遠い場合にはお引き取りできない場合がございます。また、お亡くなりになった後に他の大学にご紹介することは、非常に難しいので、住所を移される場合には献体事務室にご相談いただきたいと思います。

皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◎献体手帳について

二〇二〇年「献体手帳」をご希望の方は次の要領でお申し込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

「献体手帳の申し込み方法」

お名前・会員番号をご明記の上、送料として**九四円分の切手を同封**の上、**郵便**にてお申し込み下さい。お申し込みは、**お一人様一冊**とさせて頂きます。

なお、ご家族で会員の方が一緒に申し込まれる場合、**二冊分の送料は一四〇円**となります。三冊以上の方は事務室へお問い合わせ下さい。

申込先

〒一一三―八五一九　東京都文京区湯島一―五―四五
東京医科歯科大学大学院　臨床解剖学分野内
「東京医科歯科大学献体の会」事務室
電話　〇三―五八〇三―五一四七

《会員のご家族へのお願い》

会員の方が亡くなられた時は、次の順序でご連絡と打ち合わせをお願い致します。

一、大学への電話連絡

◎平日　午前八：三〇～午後五：〇〇

①東京医科歯科大学献体事務局（直通）〇三―五八〇三―五一四七

②東京医科歯科大学（代表）〇三―三八一三―六一一一

平日の勤務時間内出来るだけの対応を致しておりますが、直接献体事務局に連絡をいただいた時、学内に出かけている場合がございます。その時には大学（代表）の電話交換手にその旨をお伝え下されば、こちらから再度ご連絡申し上げますので、ご遺族代表者の連絡先及び亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時をお知らせ下さい。よろしくお願い申し上げます。

◎夜間・土曜・日曜・祝祭日・年末年始

東京医科歯科大学（代表）〇三―三八一三―六一一一

夜間、土曜、日曜、祝祭日、年末年始などの場合は、大学の電話交換手にその旨お伝え下されば、担当者の携帯電話に連絡がつく態勢になっております。その際、亡くなられた方の会員番号・氏名・死亡日時・連絡先・連絡者を必ずお知らせ下さい。担当者が学外におります場合には、東京医科歯科大学献体の会の会員であることをすぐには確認できませんので、ご連絡の前に会員であることを再度ご確認頂きますようお願い申し上げます。なお、迅速に対応できるような態勢をとってはおりますが、諸事情（電波受信の状態が悪いところにいる場合など）により担当者からの連絡が遅れることがございます。大学から、担当者へは連絡がつくまで対応いたしておりますので、ご容赦願います。

二、大学担当者との打ち合わせ

ご遺族の代表者は次のことを担当者と打ち合わせて下さい。

①大学がご遺体をお迎えにあがる日時

②大学がご遺体をお迎えにあがる場所（住所・電話番号）

③お棺持参の要否

④ご遺族代表者の氏名、住所、電話番号

⑤「解剖に関する遺族の承諾書」等の書類は、担当者が後日お送り致しますので、ご記入、ご捺印をお願い致します。

⑥その他…お通夜、告別式をなさる場合にはその日時・場所をお知らせ下さい。なお、ご遺体の移送は大学がお引き受けし、寝台自動車でお迎えに上がります。

三、ご家族に用意していただく書類

○ご遺体移送のときに必要な書類

死亡診断書の写し　一通

・死亡診断書の写しをご用意下さい。ご遺体を寝台自動車で移送するとき必要になります。

○後日、郵送していただく書類

埋葬・火葬許可証　一通

・埋葬・火葬許可証は担当医師の死亡診断書を添え「死亡届」を市区町村へ提出すると交付されます。

・なお、火葬予定場所には「渋谷区代々幡斎場」とご記入下さい。

※注意事項

次のような場合、献体をお断りすることがありますので、ご了承下さい。

①事故で亡くなられた場合（交通事故死、水死、焼死、災害死など）
②死亡後、時間が経過し発見が遅れた場合
③病理解剖や法医解剖によりご遺体にメスが入った場合
④旅行中など、大学から非常に遠い場所で亡くなられた場合
⑤大学から非常に遠い場所へ転居され、住所変更のご連絡がないまま転居先で亡くなられた場合
⑥死亡後、臓器提供をされた場合

なお、重症感染症の場合も献体をお受けできないことがありますので、担当者とご相談ください。

《会報製作にあたって》

◎写真の説明

赤を咲く

撮影　サロンまなは　主宰　医師
写真家・東京医科歯科大学医学部卒　大木　学

表紙の写真は、練馬区にある自然溢れる石神井公園に咲く彼岸花です。お彼岸に咲くこの花に、亡き大切な人の訪れを感じる方もいるでしょう。

公園で、朝日に照らされる虫、鳥、植物たちの輝きに目を奪われながら写真を撮っていると、沢山の生き物の死に出会います。そこでの死は循環の中にあります。朽ち果て土に還る草花、他の生命にその身を捧げる虫達。大地に戻り、また地球から蘇るという大きな流れの中にあるどれもが尊い生命であると改めて感じます。

死が排除される社会に住む私達は、自身もまたその流れにいることを、つまり死が肉体をこの星に返し、魂は肉体を離れ新たな旅に出ることを忘れがちです。

死を遠ざけ、回避しようと働く医療を担うことになる学生が解剖学実習で受けとるもの。それは人体の構造、機能という知識のみならず、死への洞察への誘いだと思います。死を排除せずに内に取り込むことを通して手にする叡智によって、生命に向き合う医療が育まれ豊かになる。解剖実習の日から四半世紀過ぎた今、その想いを強くしています。

献体をして頂いた方々と御遺族を結ぶ心の道にこの赤い花を捧げたいと思います。

◎編集後記

新しい元号での最初の会報は目もあやなヒガンバナの表紙でお届けします。「彼岸花」といえば、たしか昭和三十三年に小津安二郎監督の同名の作品があったはずと、パソコンで映画の写真を探し、昭和一桁世代の母に見せると、「田中絹代？　私、大ファンなの。出た映画は全部、見たわ。」と話が止まりません。「真ん中に写っているのは山本富士子、右が久我美子で、左が有馬稲子ね。お父さん役は誰だっけ。」「佐分利信だよ。」「いいよね、佐分利信。」

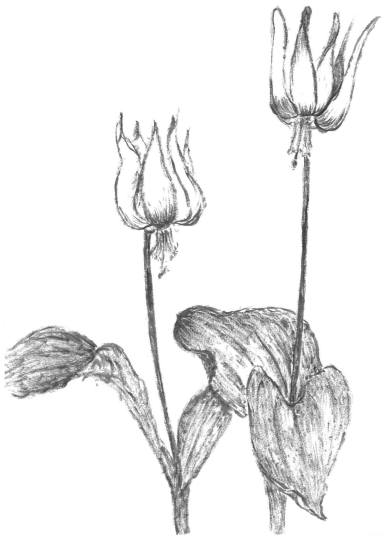
そう、この映画は父親（佐分利）の視点で始まります。妙齢の娘（有馬）の縁談を進めようとした矢先に、娘と相思いだと言う男（佐田啓二）が結婚の許しを請いにやってきます。友人の娘たちには理解ある大人の態度で接していても、我が子となれば話は別。男を追い返し、娘には、おまえがみすみす不幸になるのを見ていられないと諭すものの、「私、自分の幸せは自分で見つけます。」と娘は転勤する恋人に付いていくことを決めてしまいます。以来、結婚に反対し続けてきた父親もついには式に出てくれることになりました。お母様に心配をかけてすまないと泣く娘に母親（田中）は「いいのよ。あんたが幸せなら。」と答えるのです。

親世代の既定路線ではなく、自分が信じる道を選ぶことは容易ではありません。自分の生き方を自分で決め、周囲の理解を得るという経験は、献体の会会員の皆様が通る道であり、この会報には会員寄稿として、その決意に至るまでの苦悩や今の心境といった、お一人お一人の「彼岸花」の物語が収められていますので、ぜひ、ご覧ください。

なお、小津安二郎監督は晩年、本学医学部附属病院へ入院され、寿命を迎えた後の葬儀は築地本願寺で行われました。奇しきゆかりもあるものよと、改めて表紙から楽しんでいただけたらと存じます。

（片野尚子）

献体の会会報編集委員
四七八五　礒　秀夫
五二三九　岡本祐子
五四八二　広田順子



絵：長谷久枝

連絡先
発行　東京医科歯科大学献体の会
〒一一三―八五一九　東京都文京区湯島一―五―四五
電話　〇三（五八〇三）五一四七
ＦＡＸ　〇三（五八〇三）〇一一六
印刷所　小宮山印刷工業株式会社
〒一六二―〇八〇八　東京都新宿区天神町七八
電話　〇三―三二六〇―五二一一